



第1回 無類の 昆虫好き

小川幸夫の

虫の世界から

農業
を見る

筆者は、大学卒業後に農業機械メーカーへ入るも、自身が思う理想の農業を目指すため、2001年に千葉原柏市の実家の農業を継ぐ。畑は1町5反、うち4反がビニールハウスで年間100品目の野菜を生産している。

20年前まで地元の市場に個選でネギを出荷していたが、ネギの価格が低迷したことを受けて自宅裏に直売所を設け、色々な野菜を作って地元消費者に販売するようになる。現在は地元の百貨店や高級スーパーにコーナーを構えてもらった販売のほか、大型直売所や年間200回以上の朝市での販売、また地元レストランをはじめとたくさんのレストランに野菜を供給している。

筆者は、もともと昆虫が大好きで、幼少のころから畑で虫と一緒に遊んでいたことから、畑の虫にたいへん興味を持つ。

昆虫は作物を作るうえで害虫扱いされるが、よく観察するとそれを食べる益虫がたくさんおり、また害はほとんどなさない生態のバランスを取るどうでもいい虫もいる。この生き物たちの食いつ食われつの関係がうまく理解できれば、化学農薬の利用の手間とコストを省けるのではないかと模索する日々を送る。

現行の日本の生物農業にしても、

メーカー任せのマニュアル通りの利用になってしまっているのではないかと感じる。生物農業は、化学農薬以上に使うタイミングを考慮しなければ意味がないことを理解する必要はある。単に生物農薬を道具として見るのではなく、生き物としてよく観察して理解することが必要なのではないか。当初は筆者も、販売されている生物農薬としての天敵昆虫を一通り使っていたが、在来天敵の捕獲利用を中心に、現在は天敵が定着するような環境整備に力を入れている。

こうして野菜を生産・販売する一方で、野菜づくりで起こるこの生き物たちの攻防を農家や消費者に発信する活動もしている。これまでに地元の生涯学習講座やレストラン六本木農園でのトークイベント、丸の内朝大学の農業講座などで話してきた。また、国内のメディアだけでなく、海外のメディアからの取材も多数受けた。とくに最近ハチに興味を持ち、農業における受粉のための西洋ミツバチの飼育だけでなく、日本ミツバチの農業利用やアシナガバチやスズメバチの農業利用もテストしている。

次回からは個々のテーマを取り上げていきたい。虫の世界から見る農業、こうご期待である。

今後の執筆テーマ（予定）

- ① IPM 中の生物的防除について
Integrated Pest Management (総合的病害虫防除) の4方法の中での生物的防除の位置
- ② ハチと農業のかかわり
 - ・ 西洋ミツバチによるポリネーションの限界
 - ・ 日本ミツバチによるポリネーションの可能性
 - ・ アシナガバチやスズメバチの益虫としての機能
 - ・ 寄生蜂の重要性
- ③ アブラムシとアブラムシ好きな天敵たち
- ④ 肉食なカメムシたち
- ⑤ 雑食などでもいい虫たちがむしろいい、など